

(付属資料)

道徳教育をすすめる有識者の命・薈『13歳からの道徳教科書』2012年、育鵬社

(p. 231~235)

32

## なぜは成る——上杉鷹山よちやん



地域社会の一員としての自覚をもちて郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努めましょう。

一九六一年、アメリカ合衆国の第三十五代大統領に就任したジョン・F・ケネディは尊敬する政治家として一人の日本人の名前を挙げました。上杉鷹山（宝暦元（二七五二）〜文政五（二八三二）年）です。鷹山は江戸時代中期から後期にかけての米沢藩の藩主です。米沢藩は今の山形県の一部に当たりますが、鷹山が藩主になった頃には領地を徳川幕府に返上することを真剣に検討するほどに財政が破綻していました。そこで、鷹山は藩全体の徹底した倹約と産業振興を行って、米沢藩再生のきっかけを作りました。



▲上杉鷹山（上杉神社蔵）

明治時代の思想家、内村鑑三は『代表的日本人』という本を明治二七七（一八九四）年に英語で出し、その中で鷹山を詳しく紹介していました。ケネディはそれを読んでいたのでしょうか。ケネディを子供の頃から尊敬し、第四十二代大統領になったウィリアム・J・クリントンも鷹山を尊敬していたそうです。外国の政治家からも尊敬される上杉鷹山とはどんな人なのでしょうか。

上杉鷹山はもともと米沢藩の藩主の家系の生まれではありません。今の宮崎県の一部に当たる高鍋藩の藩主の二男として生まれました。幼い頃から頭がいいと評判の子供でしたが、母方の祖母が米沢藩の第四代藩主の娘であった縁で、鷹山は十歳で米沢藩第八代藩主・上杉重定の養子になりました。そしてわずか十七歳で第九代の藩主になりました。

上杉家はもともと大きな藩でした。しかし、関ヶ原の合戦で石田三成に味方したために徳川家康によって会津百二十万石から米沢三十万石に減封され、また第三代藩主が跡継ぎを決める前に急死したためにさらに半分の十五万石に減らされてしまいました。

収入が八分の一になったのに百二十万石当時の家臣団六千人を抱え、格式も踏襲して既に借金は二十万両にも達していました。加えて幕府への出費や洪水の被害が藩財政を直撃し、悪いことには何度かの大凶作が追い打ちをかけていました。そのため家臣や領民は貧困にあえぎ、前藩主の重定は藩士を返上して領民救済を幕府に委ねようと本気で考えていたほどでした。鷹山が藩主になったのはその頃でした。

鷹山は、藩主になるに当たって、神社に密かに誓いを立てました。藩主は「民の父母」であること、質素倹約を忘れないこと、米沢藩を必ず再生させること、その決意を怠ることがあれば神罰を受けても構わないことなどが誓われました。「民の父母」とは藩主として領民に実の父母のように慈しみの心を掛けるということです。これらの誓いは彼の死後すいぶん経って発見されましたが、若い藩主としての藩を何とか救いたいという思いがうかがえます。

藩主になって鷹山がまず先に行ったのは藩全体に倹約の命令を出すことでした。短期間に大幅な収入が見込めない以上、できるだけ出費を切り詰めていなければなりません。しかし、長年のぜいたくに慣れた

藩の上層部は若い藩主の方針に大いに不満でした。そこで鷹山は自ら率先して質素儉約に努めました。

当時は参勤交代といって江戸と領地とを交互に行き来して生活する慣習になっていましたが、江戸屋敷での自身の生活費を鷹山は七分の一にまで切り詰めました。

日常の食事は一汁一菜、衣服は綿衣とし、屋敷で働く奥女中も五十人を九人に減らしました。米沢での藩主就任祝いの宴会でもごちそうを止め、赤飯とお酒だけで行いました。その席で彼は、武士としては一番格下の足軽にまで親しく声を掛けたといいます。

このような鷹山の姿勢に共鳴する家臣もいた一方で、古くからの家臣たちの中には強く反発する者もいました。ついに、七人の有力な家臣が反旗をひるがえしました。しかし、鷹山はひるみませんでした。すぐさま七人に厳しい処分を下し、改革の姿勢をとり続けました。

鷹山は自らも鍛を取って働きました。家臣の労働意欲をふるい立たせるために、奉行以下すべての役人が参列して鷹山がまず鍛を打ち、全員が鍛を打ち続けて最後にお神酒を頂くという行事を毎年行いました。当時は藩主が自ら鍛を取って肉體労働をすることは驚くべきことでした。

米の生産高を上げるために山をくり抜いて大規模な農業用水路を作り、新田開発や河川の改修、橋の架け替え、もみ倉の建設などを行いました。また、漆や桑、こうぞの木を藩内に百万本植えました。

※「内村鑑三 代表的日本人」明治・大正期におけるキリスト教の代表的指導者である内村鑑三によって書かれたものであり、「代表的日本人」として、西郷隆盛・上杉鷹山・三島傳之助・中江藤樹・日蓮の五人を挙げている。※「岡ヶ原の合戦」一六〇〇年に、徳川家康の率いる親軍と、石田三成を中心とする西軍によって行われた戦い。戦場は、美濃国岡ヶ原、現在の岐阜県本巣郡岡ヶ原町であったためこの名がついている。この戦いに勝利した家康が江戸幕府を開いた。※「もみ倉」：脱穀する前の、まだ皮に包まれたままの状態の米をもみとい、それを保管しておく倉。

漆の実はロウソクの原料に、桑の葉は絹糸づくりの蚕のエサに、こうぞは和紙の原料になるものでした。

鷹山は質素儉約を奨励しましたが、将来の財政に繋がることにはお金を注ぎました。温泉地帯での塩の精製、藩内で産出する火打ち石の江戸での販売、墨、すずり、染料の藍玉の製造、陶器焼き場の建設、鯉の育成など産業振興による収入増を行いました。下級武士には内職として一刀彫りや人形などを作らせ、少しでも収入にするよう奨励しました。

また江戸から細井平洲という有名な学者を招いて藩の学校・興譲館を開き、家柄にとられない優秀な人材を育てました。さらに藩主自ら農民の意見を聞く制度を作つてよい意見は聞き、同時に藩の財政支出の公開も行いました。これは身分を問わず藩を挙げて再建に取り掛かろうという姿勢の表れでした。

こうして藩の立て直しの目途が立った頃、鷹山は三十五歳の若さで藩主の地位から退きました。跡を継いだのは前藩主・重定の実の息子でした。そのとき重定はまだ健在でした。鷹山は中継ぎ役を果たしたのです。鷹山の妻は重定の娘でしたが、生まれながらに心身に障害を持った妻を鷹山は心から慈しんだと言われています。重定もそれに感謝したそうです。

鷹山が藩主を退くに当たつて次の藩主・治広に与えた「伝国之辞」は彼の立脚した政治理念をよく表しています。

一、国家は先祖より子孫へ伝候国家にして、我私すべき物にはこれ無く候

一、人民は国家に属したる人民にして、我私すべき物にはこれ無く候

一、国家人民の為に立たる君にして、君の為に立たる国家人民にはこれ無く候

藩は先祖から受け継いで子孫に伝えるべきものであるから決して私有物のように考えてはならない。領民も藩主の所有物ではない。藩主は藩や領民をよくするためにこそ存在するのであってその逆ではないということが示されています。

また、「受次て国の司の身となれば忘るまじきは民の父母」「なせば成るなさねば成らぬ何事も成らぬは人のなさぬなりけり」などの言葉も鷹山は残しています。

引退後も鷹山は次の藩主やその次の藩主の後見役<sup>5</sup>として米沢藩の再建に努め、七十二歳でその生涯を閉じました。亡くなった際、家臣や領民は父母を失ったように悲しみに暮れたといいます。

---

上杉鷹山のことば

**なせば成る なさねば成らぬ 何事も 成らぬは人の なさぬなりけり**

---

米沢藩を立て直す際に、鷹山が家臣や領民に対して説いた心構えです。何かを成し遂げるといことは、誰かが与えてくれるものではなく、自らの力で作り上げるものだという、強い決意が感じられます。

---

※ 4 堀井平洲（享和三年（一八一〇）～享和五年（一八一七））：江戸時代の蘭学者。米沢藩の後は、尾張藩に招かれ、藩校・明徳堂の学長になった。  
※ 5 後見役：藩主の手助けをする役目。